

まず、一般的に日本の季節は春夏秋冬からなる四季といわれますが、出現する植物の組み合わせを勘案すると、五季目として「早春期」が加わります。田島ヶ原の場合、3月～5月上旬までが早春期、そこから6月上旬までが春期、7月下旬までが夏期、それ以降で霜が降りる10月下旬までが秋期となりました。早春期には、サクラソウやノウルシ、ノカラマツ、ハナムグラ、スギナなどが一斉に芽吹きます（写真5）。



写真5 早春期の芽吹き

アマナやジロボウエンゴサク、ノビルも散在し、この3種は早春期に偏って出現が確認されることから、早春期を標徴する植物といえます。春期になると、ノウルシが枯れ始めてスイバやミゾイチゴツナギも徐々にみられなくなっていきます。それらと置き換わるように、オギやヨシの急激な成長がみられ、ツルマメやノブドウなどのつる性植物が繁茂しだすのがこの時期の特徴です。ちなみに場所によりますが、オギとヨシの出現割合は、全体的に5：2くらいでオギの方が多くみられます。また、近年では早春期から春期にかけてノウルシが優勢に繁茂するようになり、サクラソウを被陰しています。そのノウルシは5月上旬のゴールデンウィークを過ぎると衰え始め、5月下旬にはほとんど枯れてしまいます。

6月以降の夏期にはノウルシはすっかりみられなくなりますが、サクラソウはオギやノカラマツの隙間から注ぐ光を頼りに、地表面でまだ葉を

開いて光合成をしています（写真6）。しかし、場所によってはいつの間にかコバギボウシが展葉して地表を覆うようになり、サクラソウを著しく被陰する様子が確認されました（写真7）。



写真6 夏期に地表面で展葉するサクラソウ



写真7 コバギボウシの繁茂

また、スズメウリやカラスウリ、ツククサなどが夏期に限定して出現していました。秋期になるとオギが枯れ始め、サクラソウもまったくみられなくなります。視線の高さにヤブガラシやヒルガオ、ヤブマメ、ツルマメ、ノブドウといったつる性植物が、枯れかけたオギに巻き付く様子が確認されます。地表に目を向けると、コバギボウシが目立つことに加え、秋期に偏在するツルボが淡いピンクの花を咲かせていました。

このように、田島ヶ原サクラソウ自生地の内側では、多様な植物が季節に応じて入れ替わる様子

が確認されました。ただし、この記載はたった一年の結果を示したにすぎず、一種類ごとの個体数を調べたわけでもありません。この地を一つの生態系ととらえて、長期的にモニタリングすることで今後明らかにされることが多いでしょう。もしかしたら、サクラソウと同様に個体数が減ってきている植物がいるかもしれません。サクラソウの保全を最優先とした場合、はからずも別種の居場所を奪ってしまうかもしれません。そう考えると、この地での保全のあり方についていま一度、原点に立ち返って慎重に考える必要があるように思います。

最後に人とのかかわりについて考えてみます。田島ケ原サクラソウ自生地は、かつては萱取場として利用されていました。生い茂ったオギ・ヨシを秋口に刈り込んだり、火入れをしたりすることで翌春のオギ・ヨシの生育をうながす工夫を重ねてきました。それが長年繰り返されることで、いつしか地域の文化として定着するようになりました。こうした履歴から、田島ケ原サクラソウ自生地は、人が管理することで維持される生態系といえます。国指定特別天然記念物に人の手を加えてもよいのか、という批判もあるかもしれません。しかし、長年にわたり人工的に管理されてきた里地里山が放棄され、生態系の劣化を引き起こした事例が全国各地で見受けられます。当然ながら、むやみやたらに手を加えることはできませんが、科学的な根拠に基づいた適切な方法で管理していく必要があります。例えば、自生地内にはセイタカアワダチソウやブタクサなどの外来種が毎年数多く侵入しています。最近ではスミレによく似たアメリカスミレサイシンという北アメリカ原産の外来種も、駐車場側に普通にみられるようになりました。これらは在来種の居場所を奪う危険性が

高いことから、1本残らず取り除く必要があります。一方で、ノウルシについては先に述べたとおり、絶滅が心配される在来種として最小限の手入れにとどめたいところです。まとめると、田島ケ原サクラソウ自生地における保全の方針は、生態系の急激な変化を抑えるために、人の手で積極的に管理しつつも、その手入れは最小限にとどめ、となるでしょうか。その根拠を示すための研究にこれから腰を据えて取り組もうと考えているところです。

本稿をお読みいただいた皆様は、きっと田島ケ原サクラソウ自生地への関心が高いのだらうと思います。様々な事象に関心を示すことが保全の第一歩となるわけですし、より積極的にかかわりたい方は、サクラソウを守るボランティア活動に参加されるでしょう。田島ケ原サクラソウ自生地は多くの人の支えがあって維持されています。猛暑の炎天下で、作業員さんの皆さんが大汗をかきながら、何百本、何千本の外来種を駆除する姿には頭の下がる思いです。さいたま市教育委員会文化財保護課の皆さんも試行錯誤を繰り返しながら、保全に向けたより良い方策を探ろうとしています。サクラソウを守りたい、田島ケ原を守りたい、そう願って行動する人たちが「田島ケ原サクラソウ自生地の保全」の主役であって欲しいと切に願います。タイトルで示した「守るべき対象が何か？」については、皆さんとともにこれからも考えていきたいと思います。各々ができることを考え、積極的にかかわることで、この地は持続的に保全されていくものと信じています。私も微力ながら、研究者として自分にできることを探り、保全活動の一助となれるよう尽力してまいります。今後ともよろしく願います。